

アイヌタイムズ 第33号 日本語版

★ ミソサザイの話

ガレージの中に、ミソサザイ（鳥）の巣がありました。

ある日、ミソサザイの父がミソサザイの母とともに、狩りをして子供たちに食べさせるために飛んで行き、その子供たちは巣の中に残されました。

しばらくすると、父が巣に戻ってくると、子供たちが何か怖がっている様子です。

「なにがあったんだ？ 子供たち、誰がお前たちをいじめたのか？ どうしてそんなに怖がっているんだ？」と父親は聞きました。

子供たちは言いました。「ああ、パパ、大きなおばけみたいなものが、今さっきやってきたんだ。すごく獐猛で恐ろしい顔をしてたんだ。おおきな眼で僕たちの巣を睨んだんだよ。とっても怖かった！」と言いました。

「そうか、わかった、そいつはどこに行ったんだ？」と父親が言いました。

「あっちの方へ行った」と子供が答えまし

た。

「待っておいで、そいつを追いかけて行ってやる。心配しなくていいんだよ、子供たち、お父さんがそいつをつかまえてやっつけてやるから」父親はそう言って、飛び立って行きました。

ミソサザイの父が道の曲がり角まで来てみると、そこを歩いているのはライオンでした。

しかし、ミソサザイはライオンでも怖れませんでした。ライオンの背中に舞い降りて、「何の用があってうちに来て子供たちを怖がらせたりしたんだ？！」とライオンを叱りました。

ライオンは知らぬ顔をして歩き続けました。

そのミソサザイは小さいけれど勇敢だったので、ライオンを一層激しくなじりました。

「おまえはこんなところに来るべきじゃないんだ、わかったか？ もし、またやって来るようなことがあったら、ひどく叩いてやる！」

こんなことは本当はしたくないんだが．．．」と言って、片脚を挙げながら、「それでも、またやって来たら、この脚であつという間におまえの背中をへし折ってやる！」 そう言ってそのミソサザイは巢に飛んで帰りました。

「さあさあ、子供たち、もう大丈夫だよ。あいつにはよく言い聞かせてやったから、もう戻ってくることはないよ」と父親は言いました。

おしまい。

[横山 裕之] 沙流・千歳